

シリーズ

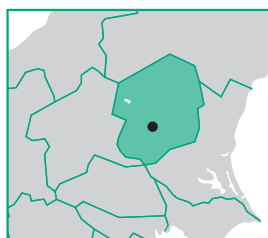
新・農業人

梨園がイチゴ栽培で通年雇用実現
丁寧な仕事で品質保ち高温対応も

株式会社ABE HOLIC 代表取締役
阿部梨園

阿部 英生さん





所在地 ● 栃木県宇都宮市
 設立 ● 2023年(創業1975年)
 経営規模 ● 梨4.2ha、イチゴ30a
 従業員 ● 35人(パートタイマー含む)
 URL ● <https://abe-nashien.com/>



阿部梨園では夏秋には梨を、冬から春はイチゴを収穫する。取材に訪れた初春はイチゴ「とちあいか」の最盛期だった(P21) 梨園の未来を担う若樹が並び広大な園(左) 10月から販売の栃木県産の品種「にっこり」は甘さと大きさ、保存性を兼ね備える人気商品(右) イチゴの出荷を手伝う農学部的大学生(右下)

農家の長男「根負け」の就農

「実は、農業はやりたくありませんでした」。阿部英生さん(47歳)から意外な言葉が漏れた。阿部梨園といえば知る人ぞ知る農園だ。『東大卒、農家の右腕になる。小さな経営改善ノウハウ100』(ダイヤモンド社)を著した佐川友彦さんが、右腕として働いた場所がまさに阿部梨園だ。インターン生として入った佐川さんはその後マネージャーとして、作業や人の動きを徹底的に見える化し、500件もの業務改善を図った。著者の鋭い着眼点はもちろんだが、提案を全面的に受け入れ、実行する阿部さんの度量の深さが、行間から伝わってくる。同時に、農業にひたむきに向き合う姿が思い浮かぶ。それだけに「やりたくなかった」という一言に驚きがあった。

祖父が開いた梨園の3代目として生まれた。品質に重きを置き、技術に磨きをかけることに余念がない父、一夫さん(74歳)の下で、子どものころから日常的に「受粉や収穫を手伝う選択肢しかなかった」という。全力を傾けるほど好きなバスケットボールの試合から帰ってくると「手伝いもしないでなぜ

試合に行った!」と血相を変えて怒られた。そんな子ども時代を過ごしただけに、就農には気が進まなかった。それでも、「農家の長男は農業を継ぐ」という圧力に根負けするかたちで、栃木県農業大学校を卒業後、就農した。

当時の梨園は2・2畝という比較的に広い規模で、収穫した約40トの梨の7割は、梨園を訪れるお客さんを中心に直販していた。働き手は両親と阿部さんとパート数名という体制ゆえ、家族の多忙ぶりは想像に難くない。「そんななかでも、私は常に『指示待ち』でした(笑)」と振り返る。

父親の英断に感謝

阿部さんに1回目のギアチェンジが起きた。就農して間もなく、一夫さんと酒を酌み交わした時のこと。「60歳になったら経営移譲するぞ」と宣言された。「当時父親は48歳。12年後には自分が経営主になる。そう思うと、少しでも早く一人前にならないといけない」と初めて思いました。

4年後、2回目のギアチェンジが起きた。新婚旅行から帰ってきた阿部さんは、再び一夫さんから、還暦を待たず「もう経営移譲する

ぞ」と言われた。「ちょうど結婚したこともあり、妻の手前、私を立ててくれたのかもしれない」(阿部さん)。そして、宣言後、両親は梨作りから本当に手を引き、野菜作りを始めてしまった。その様子を見ていたまわりから「息子に本当に譲って大丈夫か」という声がちらほら聞こえてきた。阿部さんは「その声が悔しくて——。これは見返さなければ」とスイッチが入った。

幸い、阿部さんは日記をつけるのが習慣で、日々の作業記録をこまめにつけていた。年一作の梨作りゆえ失敗はできない。過去の日記を見返しては日々の仕事に没頭した。また、埼玉県の名産に弟子入りし、品質を高めるために徹底的に摘花し、着果数を抑える技術を学んだ。父の技術や母の接客術を土台に、外で学んだ技術を加えたハイブリッドの栽培技術が今の阿部さんの土台となっている。「若いうちから任せてもらって、父の英断には感謝しかない。ただ、今もよく喧嘩します(笑)」。

「ノーと言わず」で経営改善

阿部さんが、農家の右腕となる佐川さんに出会ったのは2014年。以降7年間、佐川さんは阿部梨

園のマネージャーとして経営管理から労務管理、事務作業の効率化、ブランディング、販売促進と多方面にわたって改善案を提案した。それらを「ノーと言わずゴー」という性分の阿部さんは果敢に実行に移した。「佐川の切れ味のよい鋭い提案は秀逸でした」と阿部さん。さらに「第三者の視点で提案をするだけでなく、あらゆる選択肢を示したうえで、『阿部梨園にはこの方法が向いている』『現場がやりやすいように変えていってほしい』と歩み寄ってくれた」と振り返る。

現在の阿部梨園には、佐川さんの提案が随所に反映されている。例えば、台木とは異なる品種を接ぎ木した箇所には、品種名を記した札がぶら下げてある。「年数が浅いスタッフにもすぐ伝わるように」との配慮からだ。また、スタッフ毎の作業時間を15分単位で計測することも標準化している。「次年度、この作業にスタッフが何人必要かすぐに計算できる。シフト管理は断然しやすくなりました」と阿部さん。佐川さんは阿部梨園での経験を著書にした後、講演活動などに奔走しているが、今も月2回は同梨園を訪れ、阿部さんたちと意見交換を欠かさない。

農地が増え、人も増えた

佐川さんの存在そのものも梨園を変えた。佐川さんが積極的に阿部さんに提案する姿を見て、他のスタッフからも前向きな意見が出るようになった。「意見が採用されれば、スタッフも前向きになりますから」。佐川さんの助言のおかげもあって、梨を求める顧客は順調に増え、生産した梨の大半を直販できるようになった。それどころか、お断りしなければならぬほど注文が来るようになった。

すると、梨園に隣接する農地を持つ親戚や知人から「阿部梨園で農地を使ってほしい」という依頼が寄せられた。2017年から少しずつ増やし、面積は4・2ヘクタールに。農地が集まると、人も集まってきた。阿部さんの学生時代のあるバスケットボール部の後輩である篠原健太郎さんは、同梨園でパートとして5年間ほど働いた後、正社員となって今では現場のまとめ役になっている。24年には、大金俊介さんが正社員として加わった。長年、農業関連機関に身を置き、多くの農家を組織化してきた大金さんの手腕にほれこんだ阿部さんの懇願により、入社に至ったという。



左は農園を総括する篠原さん。右が現場と事務局を担う大金さん。心強い仲間たちとともに

右腕と左腕ができた阿部さんに新たな悩みが生まれた。スタッフを通年安定して雇用できないことだった。春から夏が繁忙期の同梨園では、35人ほどのスタッフが働くが、冬季になると、剪定に携わる10人程度のみが働く。梨という作物の特性上とはいえ、通年雇用できないことは「経営者のエゴではないのか」と思っていた。そして、ついに新たなギアチェンジをした。24年から始めたイチゴ生産だ。バスケットボール仲間、郵便局の幹部職員の友人から「栃木といえはイチゴでしょ。梨はニッチ市場」



長男の遥仁さん(右写真の左)が植えたまだ細い樹の傍らには、父、一夫さんの大樹が寄り添う。果実をたたえる樹になるまで、この先もずっと、最高の梨を毎年作り続けたいと先を見据える(左)

と言われたことも、阿部さんの心に灯をつけた。

異常気象へも果敢に対応

梨園に隣接した場所に30坪の軒高ハウスを建て、栃木県が開発したイチゴの新品種「とちあいか」を生産している。夏が忙しい梨と、冬から春が繁忙期のイチゴを組み合

わせたことで、労働力が平準化できるようになった。イチゴ栽培は、阿部さん自身、長年温めていたアイデアでもあった。いつでも始められるよう、県内の後輩のイチゴ農家に弟子入りし、作業を手伝いながら、技術を教わった。そして言い出しつてもある郵便局の友人から「販売面では応援する」という心強い提案を受け、一歩を踏み出した。

阿部さんのイチゴは1シーズン目から、関東一円の郵便局で「ふるさと小包」の商品として扱われている。阿部さんは、通年雇用できるスタッフが増えたことに手応えを感じている。梨だけの時は10数人だった通年雇用者の数が25人まで増えた。

2024年、栃木県特産の梨は高温障害の影響を大きく受けた。阿部さんの梨園も例外ではなかった。特に栃木県産の品種「にっこり」は、高温により果実の一部に黒いシミができる日焼けの症状が出て、商品化率が低下した。高温に備え、樹全体に散水をしたり、肥料のやり方を変えたりと工夫をしたそう。ただ、高温が幸いし、品質が高まる品種もあり、万策があるわけではない。阿部さんはまた「これらの高温対策によってどうい

効果が出るのかという客観的な裏付けを取っていければ」と今後、試験研究機関などとの連携の必要性を訴える。

それでも、梨はイチゴと比べ、樹も太く、根も広範囲に張り巡らされており、外的環境に比較的強い作物だと阿部さんは感じている。一方、イチゴは根圏が狭く、多少の変化でも影響を受けるデリケートな作物だ。「対照的な作物を経験することから得られることも多いのではないかな」と阿部さんは前を向く。

果樹栽培ならではの面白さ

大勢のスタッフに混じって、阿部さんの長男、遥仁さん(20歳)がイチゴのバック詰め作業をしていた。作物も増え、面積や人も増え、常に明るい会話が飛び交う様子を身近に見ながら育った遥仁さん。みずから就農の意思を示し、大学に通いながら阿部家の農業を学んでいる。そんな遥仁さんの姿を見て、目を細めているのが阿部さんの父、一夫さんだ。梨園を阿部さんに任せて以来、サツマイモなど野菜作りに専念してきたが、遥仁さんが「自分もやる」と宣言するや否や、一夫さんは拡大した梨園の整

備を率先して手伝ってくれるようになったという。

梨園は4・2畝(収穫可能な園地は2・7畝)まで広がり、生産量は60tに増えた。今後も、品質を追求し、手間暇をかけた果樹を、個人の贈答向けをメインに販売していく方向に変わりはなくという。近年は、プロの職人の手によって、クラフトビールやケーキの素材としても用いられている。将来は自社での加工や直売も計画しているそうだ。

2023年には法人化も果たした。社名のHOLICとは、「夢中になる」「惹きつけられる」という意味だ。「私たちは果樹に夢中になる」「地域をよくするために夢中になりたい」「お客さんにも阿部梨園の取り組みに夢中になってもらいたい」などが込められている。

剪定と誘引が終わったばかりの梨園に立った阿部さんは「ここには、父が植えた樹、自分が植えた樹、遥仁が植えた樹があります。3代にわたる梨が一つの園地にあるというのは、果樹ならではの面白さだ。今、農業は自分にとって超楽しいですよ」と迷いなく言い切った。

(新潟食料農業大学 青山浩子/文



藤井 大介/撮影)